東京新聞 夕刊
中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町二丁目1番4号
〒100-8505 電話 03(6910)221

あの人に迫る

本当の笑顔こそ究極のデザイン

水谷　孝次　アートディレクター

数々の賞を受け、売れっ子デザイナーの道を走ってきた水谷孝次さん(五七)は今、「メリー・プロジェクト」という社会運動を進めている。これまで世界二十六の国と地域で三万人以上の笑顔を撮影した。世界中のまちを笑顔でいっぱいにしようという、その思いは強く熱い。（早川昌幸）

二〇〇八年の北京五輪で、子どもたちの笑顔をプリントした二千八本の傘が開会式を飾りました。

僕が出会い、話し、撮影した世界中の子どもたちです。どの顔にも思い出があります。

名古屋・大須の生まれです。

写真・中森麻未

みずたに・こうじ　1951（昭和26）年名古屋市中区生まれ。中部工大（現中部大）工学部電子工学科卒。日本デザインセンターを経て83年に水谷事務所を設立。99年、「笑顔は世界共通のコミュニケーション」を合言葉にメリー・プロジェクトを始める。

ワルシャワ国際ポスタービエンナーレ展金賞（96年）、ニューヨーク・アートディレクターズクラブ国際展金賞（94年）など受賞多数。フランク・シナトラを起用した全日空国際線キャンペーン、森永製菓の「ウイダーｉｎゼリー」のパッケージデザイン、ファッション雑誌「流行通信」のリニューアルキャンペーンなどを手掛けた。

〇七年夏のある日、世界的な映画監督で開会式の指揮を執る張芸謀（チャンイーモウ）さんが子どもの笑顔の写真を使うプランを考えていると知ったのが始まりだった。「これだけ多くの笑顔の写真を撮っているのは世界中探しても僕しかいない」と自信があった。

メリー・プロジェクトに乗りだすきっかけは何でしたか。

新しい何かに踏みだそうと考えたが、何をやっていいのか分からない。それまで社会性があって文化的なポスターも制作したことはあったが、もう一つだった。次にやるべきことを探して暗中模索だった。

一九九九年の夏のある日、事務所で書類の整理をしている時、フィルムの束が出てきた。米国滞在中にバスの中で撮った子どもたちの写真。十分ほどで二百枚も撮ったと思いますが、大きくプリントして机の上に並べて眺めていた。どれも純真な笑顔だった。

その子どもたちの表情に未来への希望、さらには自分の未来と時代の未来を感じた。時代はエイズ、不況、自殺や失業者の増加と、世紀末の暗さを呈していた。二十一世紀の僕の仕事はこれだと直感した。

それはインスピレーションであり、偶然であり、必然だった。僕の場合、ぎりぎりのところで悪戦苦闘しているとき、いつも出会いがあり、誰かが助けてくれる。今後、ヒロシマ、ナガサキ、オキナワでもプロジェクトを展開しようと思っていますが、死んだ後にも志が残るような仕事がしたいのです。

そしてこの年、メリー・プロジェクトが動き始めました。

撮影する中で特に心に残ったのは、貧困や飢餓といった「負」の部分を持った国の子どもたち。カネやモノはないが、どの子も生き生きと笑い、ピュアな目をしていた。

メリー（ＭＥＲＲＹ）にはハッピーと同じような意味があるけど、それよりも広く、深い。ケニアのスラム街で「あなたにとってメリーとは？」という僕の質問に、少女は「ＹＯＵ（あなた）」と書いた。いぶかしげな表情の僕に、彼女は満面の笑みで言った。「私は今まで笑ったことがないし、メリーなんて考えたこともなかった。初めてメリーって何かを考えた今日は最良の日。私にとってメリーはあなたよ」って。

モスクワで三歳くらいの目のきれいな女の子を撮った時、フラッシュがたかれるたび、引き付けのような反応を起こした。おばあちゃんが「この子はダウン症なんですよ」と説明した。「普段は引っ込み思案で人前に出るのを嫌がる。なのに、あなたのカメラの前で心から笑っているのを見て、すごくうれしかったわ」と。

阪神大震災という負の遺産を引きずる神戸の工事現場のフェンスに並べた笑顔のポスターを見て、朝鮮半島出身の冷めん屋のおばちゃんは「救われる」と言ってくれた。そんな出会いが僕の原動力になった。

水谷さんにとってのメリーとは。

「和顔愛語（わげんあいご）」。何もあげる物がないなら、あなたが笑顔と優しい言葉をあげなさい、そうしたらあなたにも返ってきますよ。釈迦（しゃか）が言った言葉です。

世界を幸せに楽しくしようと、みんなの笑顔を集めるプロジェクトを通して、僕自身もたくさんのメリーをもらった。広告の世界で作られた笑顔ではなく、心からわき上がる思いが顔に表れる笑顔。それを見るだけで、人は元気になり、僕自身も幸せになることができる。本当の笑顔こそアートであり、地球の未来を築くための究極のデザインだと思う。

僕の信念は「思ったら飛べ」。川が狭いか広いかは別として、とにかく自分が先に渡ることで物事は進み始める。問題解決には一歩でも先に進まないと駄目なんです。プロジェクトもそうだし、人生も。

敗戦から立ち直り、大須も町全体にエネルギーがあって「これからどんどん暮らしがよくなっていくんだ」という希望にあふれていた。だけど、目を凝らしてみると決して癒えない傷や闇のようなものがあちこちに残っていた。

わが家にもその闇があった。父は戦争で負傷し、片方の聴力を失っていた。祖父の板金加工の仕事を手伝っていたが、もめ事を持ち込んでは母とけんかが絶えなかった。夜になると、たとえ電気をつけてもほかの家々の明るさと比べ、自分の家の中は少し暗く感じられた。

「お父さんはどうしてあんなふうなんだろう。戦争のせいだ、世の中が悪いんだ。大人になったら、僕が世の中を変えてやる」。僕は三歳にして、そんなことを考える子どもでした。

上京してデザイナーとして成功しました。

二十世紀末の東京は広告とグラフィックデザインが全盛期。バブル経済と重なり、とても忙しく、エキサイティングな時代でした。寝食を忘れて働き、金を稼ぎ、多くの賞をもらった。

しかし、どうしようもない疑問がわいた。「こういう人生でいいのか。こんなことのために僕は今まで頑張ってきたのか」と。気持ちのむなしさと裏腹に通帳の金額は増えていく。代理店が次々と持ってくる依頼を断る勇気さえなかった。

ある日、大手自動車メーカーの仕事が来た。モデルはイチロー。キャンペーン一つで三十億、四十億円という金が動く。内容が固まり、原稿を届けた時、なぜか気持ちの糸がぷつんと切れた。「もういいです。やる気がなくなっちゃいました」

モノを売るため、利益を高めるための仕事で、いわば企業の〝芸者〟だった。ここから抜けだそう。三歳のころ、父を見て「世の中を変える」と考えたのを思い出そう。

バブル崩壊と同時にデザインの波も変わろうとしていた。今では「ソーシャルビジネス」「ソーシャルデザイン」といった概念が定着してきた。利潤追求ではなく、社会をよくし、人を幸せにする仕事が主流になろうとしている。

あなたに伝えたい

作られた笑顔ではなく、心からわき上がる思いが顔に表れる笑顔。人は元気になり、僕自身も幸せになることができる。